
闇の卵と光の卵

海夜音琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇の卵と光の卵

【Nコード】

N4896M

【作者名】

海夜音琴

【あらすじ】

わけあって一緒に暮らしているキメラ・アルウ・ロット・ザルガスの4人は、魔法学校のクラスの中でもトップクラスの魔力を持つ魔女＆魔法使いである。いつもと変わらないある日、キメラの魔力が消えていく事件が起こって――！？

4人の少年少女が自分の正体を知ったとき、世界は破滅へと向かうのか、それとも救われるのだろうか――？

最初から修正をしています。只今1 - 2まで完了！

序章 9月11日修正完了！（前書き）

非常に読みにくいと思われます。
でも読んで下さい。

9月11日、修正致しました^^

序章 9月11日修正完了！

空には眩しい程の青が広がり、所々に、モコモコと綿菓子のような入道雲が広がっている。

まさに、常夏の島の空である。

しかし不思議なことに、この島に^{けだる}気怠ような暑さはない。南の島だというのに、快適な温度なのだ。

そんな不思議な島にある村では、4人の女と老婆が言い争っていた。

「そなたらの子は——の子と、——の子じゃ！ 生きておれば世界が脅かされる、いわば災厄のような存在じゃ！」

白髪の老婆は、噛みつくような勢いで怒鳴っている。その姿は、獅子の迫力を思わせる何かがあったが、女たちは決して怯まない。

「——この子たちが災厄だと言うなら、一体どうすればいいんですか」

蒼い髪に緑色の瞳をもつ女が、睨みながら問いかける。

「何じゃその目は！ わしに文句でもあるんか！」

「……いいえ、ございませんわ」

「ふんっ、まあよい。そなたらの子には死んでもらう！ 災厄を生かしてはおけん！」

そう言つと、老婆は腰に携えていた剣を構えた。

「お……お待ちください！」

必死の形相で老婆をとめたのは、金髪にすみれ色の瞳をもつ女であつた。

「確かに私とシルニイの子は災厄……かもしれないけど、ティツキイとローラの子は正反対で——」

「——の子だけが生き残つても力が釣り合わず、余計に世界を破滅に導くわ！」

金髪の女が言おうとしたことを遮り、老婆は憤然と言い放った。

「だったら、——の子と——の子を、ずっと一緒にいさせたら力は釣り合うんじゃない？」

白銀の髪に若葉色の瞳をもつ女が、腕を組み挑戦的に言う。どうやら、4人の中でも1番気が強いようだ。

「何戯けたことを……」

老婆は地べたにぺつと唾を吐き捨てると、構えていた剣を鞘に戻した。その予想外の行動に、女たちは驚きを隠せなかった。4人も、老婆は剣を振り上げ子供たちを切り殺すと思っていたのだ。

「どう……なさったのですか……」

紫の髪に蒼い瞳をもつ女が遠慮がちに尋ねた。少しなよなよとしていて、頼りなさそうに見える。

「そなたらの子がずっと一緒にいれば力が釣り合うと言うのなら、実際に試してみるがよい。——しかし！」

ほつと息をついた女たちに、間髪いれずに老婆は続ける。

「この村はダメじゃ。ほとんどの者が子供たちの秘密を知っておるからな。そうじゃな……ここからずっと遠い国にある辺鄙な村……キザナの村あたりがいいじゃろう」

「……分かりました。早急に用意を整え、出発致します。今までお世話になりました」

金髪の女は社交辞令のような礼を固い声で述べると、老婆の前から去ろうとした。……が、それは阻まれた。立ち去ろうとする女たちの背中に、老婆は冷水を浴びせるかの如く言葉を投げかける。

「おや、何か勘違いをしておるようじゃな。そなたらをキザナへ行かす気はないぞよ。行くのは子供たちじゃ」

その一言に、女たちは音が鳴りそうな勢いで振り返った。

「今、何と」

「キザナに行くのはそなたらではなく、子供たちと言ったんじゃない」

老婆はにやり、気持ちの悪い笑みを浮かべた。

「ま……まだ1才にもなっていないのに!？」

「そうじゃ」

「冗つ談じゃないわよ！」

銀髪の女が、狂ったように声を張り上げる。

「子供たちだけで他の村に行かす？ まだ生まれて半年も経っていない、赤ん坊を？ ふざけんじゃないわよ！ そんなの、この子たちを殺しに行かすようなもんじゃない！ 調子に乗るのもいい加減にしなさいよ！」

体の中に溜まった毒を全て吐きだした銀髪の女は、肩で荒く息をしながらきつく老婆を睨みつけた。

そんな女を、金髪の女は「シルニイ！」と窘める。たしな

「おやおや。仮にもこの村の長であるわしに、そんな口をきいていと思ってるのかえ？」

老婆は嫌味つたらしいくらい丁寧な口調で言葉を紡ぐいだ後、いつもの尊大な態度に戻った。

「まあよい。そなたらの子についてじゃが、“時進めの術”を使えばよからう」

“時進めの術”とは、その名の通り術をかけた対象の時を進める術である。まだ芽の花に術をかければ早送りのように綺麗な花を咲かす。生まれたての仔犬に術をかければあつという間に成犬へと成長する。

時進めの術は魔力のある者なら簡単に使えるが、それは術をかける対象が“物”の時のみ。命ある対象に術をかけるには多大な魔力を必要とし、並大抵の魔女や魔法使いには使えないのだ。

「そ……そんな高度な魔法、私たちに使えませんか……」

「おや、そなたらなら使えるはずじゃ。かの有名な大魔女と崇められたお前たちならな！」

「っ！ ……なぜ、そのことを」

「そなたらがこの島に来たときから知っておったよ。まあ、そなたらは人里離れたこの島なら誰も知らんと思っとったようじゃがな。わしはな、実は滅びたレムという村の生き残りであつての。レムの村の別名は知っておるか？」

「神と……悪魔の生まれた……村……」

蒼い髪の女は信じられないと言いたげに目を大きく見開いた。それだけ有り得ないことなのだ。

「そう、神と悪魔の生まれた村。それがわしの住んどった村じゃった。まあ、その神と悪魔に滅ばされてしまったがの。レムに生まれた者は一人一人秀でた特徴をもつことになっておる。わしの特徴は宇宙の声までを聞ける耳なのじゃ」

「だから……あなたは私たちのことを知っているのですね……」

「そうじゃ。さあ！ 無駄話もここまでじゃ。時進めの術を用い子供たちの時を進めるか、ここで殺すか、どっちがよい。わしは優しいから選ばしてやるぞよ」

老婆は口いっぱいに、意地の悪い笑みを浮かべた。

「……サデイストめ……」

金髪の女は小声でそう呟くと、老婆に背を向け歩き始めた。他の3人も、それに倣う。

「ど……どこへ行くのじゃ！」

老婆はその醜い手で、女のか細い肩を掴む。が、女は振り返りもせずにその手を払いのけ、こう告げた。

「儀式を行うのだ。命ある対象に術をかけるには、多大な魔力を必要とする。儀式で我らの魔力を高めなければならぬ」

低いその声音は、静かな怒りをびんびんと感じる。老婆は少しだけたじろいでしまった。

女たちはまた歩き始め、ついには老婆のいるところから見えなくなった。

その刹那、老婆は弾けた笑い声をあげた。

「馬鹿な奴らじゃ。知らんのかね、時進めの術を命ある対象にかけた場合、術者の寿命が縮むということを——」

しかし、老婆は一欠けらも想像しなかった。

4人の女たちが、時進めを使うと寿命が縮むということを知って

いることを。

そして5年後、女たちの子が自分を殺しに来るなんて、想像する
余地もなかった――。

序章 9月11日修正完了！（後書き）

どうでしたか？

とりあえずは、読んでくれてありがとうございます。
感想など頂けると嬉しいです。

第1章 首飾り 1 - 1 9月26日修正完了! (前書き)

1話考えるのにすごく時間がかかる……。

9月26日、修正完了致しました^^

第1章 首飾り 1 - 1 9月26日修正完了！

開け放たれた窓から流れ込んでくる初夏の風が、そつとキメラの頬をなでる。気持ちよさそうに目を細めた彼女は、つい視線を窓の外へと転じてしまう。

空は茜と紺のグラデーションに色づき、熟した果実のような太陽は黄金の光を放っている。その光景はとても幻想的で、キメラは思わず今やっていること——魔法の特訓を忘れて見とれてしまっていた。

（先輩の言ってたことは本当だったんだ……。5月下旬のよく晴れた日、学校内にあるヴェル先生の説教部屋から6時27分に見れる景色は最高だつて話し。半信半疑だったけど、確かにこれは最高だわ……）

心の中で呟きながら、窓の外に魅入っているキメラの脇腹を、隣にいる少年が肘で小突いた。彼女は肩をびくつと震わし、少年に視線を移す。

——赤の混じった金髪ストロベリーブロードに金色の瞳をもつ少年が、目の前の机を指さしている。それを見て、キメラは自分が何をしていたのかやっと思ひ出した。すぐさま、机の上に視線を注ぐ。

机の上にあるのは1枚の紙切れ。そこには不思議な模様が描かれている。

複雑な記号や文字が円状に描かれ、その中心には炎を模った紋章かたど——火の紋章が描かれている。紙に描かれているのは、火の魔法陣のようだ。

キメラは魔法陣を見ながら、自分を抑えつけるように拳を握り、小刻みに震えていた。

しかし、小さく「あ」と声を漏らすと、椅子から立ち上がった。片方の手を、机を挟んで向かい側に座っているヴェル・フェネクス先生へとかざす。目からはいつもの輝きが消え去り、表情もない。

キメラは一言、呪文を唱えた。

「ファイヤー」

その声には覇気がなく、機械的であった。かざした片手から、ヴェルに向けて炎が噴射される。それはまるで、火炎放射機のように。

しかし、ヴェルはそれを余地していたかのように立ちあがり、両手を自分の前に出して呪文を唱えた。

「オタウ！」

一瞬にして、水色に透けるバリアが出来上がる。キメラの手から噴射される炎は、ヴェルの作りだしたバリアに直撃をした。

ドゴオ！ という轟音とともに、煙が部屋を包みこむ。げぼげぼと咳が聞こえる中、ヴェルの怒号が響き渡った。

「キメラ・ラーナボルカアアア！！！！」

そよ風に扇がれ、煙は夕刻の空へと躍り出ていく。煙が流れ出たあと、ヴェルは真つ赤な髪をかき揚げ、辺りを見回した。しかしこの爆発を起こした張本人であるキメラ・ラーナボルカの姿を見当たらなかった。

「アルウ・パンプローナ！」

部屋の隅で服についた埃を払っていた少年は「何ですか？」とヴェルを見た。先程、窓の外に魅入っていたキメラの脇腹を小突いた少年である。

「今日の特訓は終了だよ。また明日やる」

アルウは端正な顔を、わざとらしく歪めた。

「明日はクラブの活動の日なんだけど。クラブの日くらい、特訓やめませんか？」

「クラブなんて関係ないよ！ だいたい、特訓に付き合ってるあたしの身にもなつてほしいよ、まったく……。分かったらさっさとお帰り。ああ、キメラを探してちゃんと連れて帰っておくれ」

そう言つと、ヴェルはさっきの爆発により黒ずんでしまった眼鏡のレンズ部分を拭き始めた。どうやら、話しは終わったようだ。

アルウは椅子の背もたれにかけてあったカラスのように真黒な口
ーブを羽織ると、ヴェルに向かってちらりと頭こづかを垂れて出て行った。

アルウは学校——ベイス魔法学校の正門の前で佇んでいた。キメ
ラの居場所が皆目見当もつかないのだ。

「ったく……。どこ行つたんだよ、メラの奴！」

特訓を逃げ出したのだから、先に家に帰っているのかもしれない
だが、それはキメラの性格上有り得ないことである。先生が家まで
押し掛けてくる可能性を考え、どこか別の場所に身を隠しているに
違いない……。

アルウは自分に問う。だったらキメラはどこへ行つたのか、と。

「だからそれが分かんねえんだよー！」

思わず声をあらげてしまう。自問自答出来ない齒痒はがゆさに腹を立て
て。

それからどのくらい経つたところか、夕闇を飛んでいく鴉かいつが一声鳴
くのと同時に、俯いていたアルウは勢いよく顔をあげた。金色の瞳
は驚いたように見開かれている。彼の周りには誰もいないが、アル
ウはそつと、「メラ……？」と呟いた。

目を見開いたまま、空を仰ぐ。茜と紺のグラデーションはとうに
なくなり、西の空の端っこがほんのりと紅いだけであつた。

「この明るさなら確かに……」

アルウはぶつぶつと呟くと、突然、帰路とは反対方向に向かつて
駆けだした。

5分ほど走つたアルウは今、小高い丘の頂上付近にいた。なぜ頂
上付近にいるのかというと、彼が一点を見続けてまったく動かなくな
つたのである。

彼の視線を辿ると、そこには一本の木。その根元には、アルウと
同じ赤金髪をもつ少女が、片膝を立ててもたれかかっていた。憂い
の満ちた銀色の瞳はどこか遠くを見ており、その様子は物哀しげで
もあり、また綺麗でもある。

見とれていたアルウは意を決して、少女の方へと歩み出した。

「メラ！」

少女はゆっくりと顔をこちらに向ける。銀の瞳がアルウの姿を捉えると、驚いて立ち上がった。

「ルウ！？ どうしてここに……」

「それだよ」

アルウはキメラの足元に置いてあるカンテラを指さした。

「なるほど……。これに火を燈すときの魔力を感じ取ったってわけね」

キメラはほう、と短く息を吐く。

「さすが、私と同じ特訓組ね」

「逃げ出した奴と一緒にするなよ」

アルウがからかい調子で言うのと、キメラは罰が悪そうに舌を出す。「しょうがないじゃない。だってヴェル先生の声、聞いた？ あの声には完全なる殺意が含まれていた。あのまま逃げ出さなかったら、私は間違いなく殺されていたわ！」

キメラは芝居がかった口調でペラペラとまくしたてた。それに負けじと、アルウも芝居がかった台詞を口にする。

「ああ、俺はキメラ・ラーナボル力が逃亡したばかりに、そのとばっちりを受けたんだ」

「え……それ本当なの？」

芝居をあつさり止め、ころつといつものキメラに戻った。

「さあな（嘘だけどね。とばっちりなんか受けてないし）」

アルウは意味深な笑みを浮かべると、キメラよりも先に言葉を紡ぐ。

「そろそろ帰ろう。ザルガスもロツトも待ってるだろうし」

「ちょ……！ さあなつて何なのよ！」

「さあな」

「だからさあなつて何なのよー！」

キメラの大声が、夜空に虚しくこだました。

第1章 首飾り 1 - 1 9月26日修正完了! (後書き)

どうでしたか？

読みにくい文章を読んで頂き、ありがとうございます。

感想・意見など、待っております。

1 - 2 10月9日、修正完了！（前書き）

今回は相当文がぐちゃぐちゃです……。

1 - 2 10月9日、修正完了！

「キメラ達、遅いと思いません、ザルガス？」

エプロンをつけた少女が、隣で野菜を刻んでいる少年に声をかけた。少年はゆっくりと顔をあげ、時計を見上げる。

「7時か。少し遅いな」

それだけ言うと、野菜を切り刻むのに専念しだした。そんな少年の姿を見て少女は、ぷつと頬を膨らませる。

「もう！ ザルガスは二人が心配じゃないんですの！？」

ザルガスはふうと溜息をつく、野菜を切る手をとめ、少女をじつと見た。

「いいか、ロット。あいつならもうじき帰ってくるさ。——ほら、噂をすれば」

ザルガスが言ったのと同時に玄関の戸が開き、ただいまーと元気な声が二つ、聞こえてくる。

少女——ロットは、そつと胸を撫で下ろした。アルウはともかく、キメラのことが心配だったのだ。

「ロット、ザルガス、ただいま！」

赤金髪を振り乱しながらリビングに飛び込んでくるキメラは、なんとも愛らしい。

「おかえりなさい、キメラ」

「おう」

ロットがぐすくす笑いながら言い、ザルガスが軽く片手をあげながら言うと、キメラは満足したのか、自身の部屋に戻って行った。

キメラと入れ替わるように、アルウがリビングへ入ってくる。

「ロット、とりあえず腹減った！」

「もう出来てますわ、アルウ」

ロットが夜ごはんの用意を始めたのを見ると、アルウも自分の部屋に着替えに行った。

今、キメラの目の前にはロットが腕を揮って作った料理が並べられている。

今日の献立は山羊の肉が入ったシチュー（ロットの1番の得意料理）にピニャッソ（キャベツに似ているが、それよりも甘い野菜）のサラダ。どれもキメラの好物だ。

「山羊肉のシチューにピニャッソサラダだ！ いただきまー……」

キメラが料理にパクつこうとしたその刹那、玄関の戸が規則正しく3回、鳴り響いた。

「こんな時間に誰だ？」

「私、見てくる」

キメラは椅子から立ち上がると玄関に向かう。

（こんな時間に一体誰だろう……？）

そんな考えが体中を駆け巡る中、キメラは戸を開けようとベージュ色の扉の取っ手に手をかけた。

「どちらさまで——」

少し開いた戸の隙間から覗いた訪問者の顔を見て、キメラはその場に凍りつく。

「おや、キメラかい」

キメラの意に反して、訪問者はキメラを見ると親しげに笑いながら片手をあげた。

「キメラ、誰でしたの？」

ロットがリビングからひよっこり顔を出し訪れた者の顔を見ると、「まあ！」と小さく声をあげた。

「ヴェル先生じゃありませんか！ 一体どうされたんですの！？」

そう、この家を訪ねてきたのは紛れもなくベイス魔法学校火魔法クラス担当教諭、ヴェル・フェネキスだったのだ。

「このシチュー美味しいねえ、ロットが作ったのかい？」

話しがある、ということキメラ達の住む家に上がりこんだヴェルは、事もあるうか晩御飯まで食べている。

「ええ。お口にあつてよかつたですわ」

ヴェルは美味しそうにシチューを啜った。その隣には、大好物なものにも関わらず料理に手をつけていないキメラが座っている。

「キメラ、食べないのか？」

向かい側に座っているザルガスが声をかけるも、キメラはかぶりを振るだけ。

「先生、話して一体何ですか」

アルウが硬い声で問う。しかしヴェルはそれを無視し、他愛もない話題を持ちかけてきた。

「そういえば、あんたらは4人で暮らしているんだっけ？」

「そうですわ」

「親は？ 死んじゃったのかい？」

(……このおばさん、よく臆せず死んだかどうかなんて聞けるわね) 黙秘を決め込んでいるキメラは心の中でそつと呟く。

「さあ。俺らも憶えてないですよね」

「憶えているのはこの村に来た時、ええつとわたくし達が10才の頃ですわね。――あれは、太陽の光がとても眩しい日でしたわ」

――ふと気がつくと、今よりも幼いキメラ達は村の入り口に立っていた。

何故ここにいいのか、自分達が何者なのか、思い出そうとしても思い出せない。唯一憶えていることといえば、自分の名と、一緒にいる人達の名前だけであった。

頭の中でくお前達はこれからこの村で暮らせよという謎の音が響いている。4人の少年少女は頷くと、この村の長老の元へと向かった。

長老は優しい老婆であった。キメラ達がこの村で暮らしたいという、嫌な顔一つせずにこの赤い屋根の平屋に案内してくれた――。

「――それからずっとこの家で暮らしていますわ」

「ふーん」

どうやら、ヴェルは途中で興味がなくなったようだ。頼杖をつき、スプーンを弄んでいるのだから。

「……先生、話して何なんですか」

アルウが先程よりも硬い声でもう一度、ヴェルに尋ねる。

「え、話し？ そんなもんあったけな……ああ、そうだった！ まずキメラ、あんたに話したよ」

名を呼ばれると、キメラを肩がビクつと震えた。

「さつきはよくも逃げ出してくれたねえ、キメラア？」

「……逃げ出したってどういうことですか……？」

ロットが訝しげにキメラとヴェルを交互に見やる。

「この子は今日の特訓で故意に私の部屋を爆破し、その隙に逃げ出したんだよ。ね、キメラ」

ヴェルはキメラを見つめてにーんまり。

「本当ですよ、キメラ……？」

「違うわ！」

喋らないと決めていたキメラだったが、これには反論しなくてはならない。

「わざとなんかじゃないわ！ 制御の失敗で魔法が暴走しちゃって、それが先生のバリアにたまたま当たって……そしたら何でか分からないけど爆発しちゃったのよ！」

喋り終えた瞬間、ヴェルは豪快に笑い始めた。そのいきなりの行動に、キメラ達4人は呆気をとられた。

「いやあごめんよ。それぐらい分かってるさ、キメラ。ちょっとあんたをからかいたくなってるね」

笑い涙を拭くと、ヴェルは言葉を続ける。

「本当の話しはキメラとアルウ、あんたら2人にだ」

先程の笑いから一転、ヴェルは今までにないほど真剣な顔をしていた。

「あんた達、このままだと4年生に進級できないかもしれないよ」

「……えっ？」

「いいかい。あんたらの制御が不完全なせいで起こった事件は今月で6件。さすがに校長も呆れていた。次問題を起こしたら留年にするてばやいてたよ」

「……留……年……」

キメラは消え入りそうな声で呟くと、ふらふらと気絶寸前で自分の部屋に戻って行く。アルウはアルウで、椅子に座ってはいるが心ここにあらずといった感じで、放心状態に陥っている。

「2人とも素質はあるんだけどねえ、こればかりは仕方ないよ」
ふう、と溜息をつく、ヴェルは立ち上がった。

「そろそろ帰ろうかね。ロット、ごちそうさま」

そう言つと、ヴェルは玄関へと向かう。見送ろうと、ロットとザルガスがその後を追った。

「あの……先生！」

ベージユの扉を押し開け、お邪魔しましたを言おうとしていたヴェルはロットの呼びかけにん？ と振り帰る。

「キメラ達の留年の話しだけなら、家に上がらなくてもよかったんじゃないんですの？」

その何気ない問いかけを、ヴェルはにこやかにかわした。

「じゃ、また明日学校でね」

そう言つと、ヴェル・フェネキスは暗闇の中へとその身を躍らせていった。

「俺さあ、聞いた事あるんだけど」

ベージユの扉を閉めた途端、ザルガスがぼつりと言う。

「何をですの？」

「ヴェル先生つて毎晩、生徒の家に行つて晩御飯を食べてんだつて噂では、晩御飯代を浮かすためらしい」

「それ……本当ですの？」

「あくまで噂だからな、真実かどうかは分からない」

「そういう人だったのですね。少し残念ですわ、いい先生だと思つていましたのに」

ロットはスカートの裾を翻し、リビングへと戻って行った。

1 - 2 10月9日、修正完了！（後書き）

どうでしたか？

今回はあまり自信がありません……。

感想、ご意見などお待ちしております。

1 - 3 (前書き)

書きたかったお話。

でも、上手く書けませんでした。

1 - 2のラストを、変えました。

アルウは今、キメラとロットの部屋——女子部屋の扉の前に立っている。

ヴェルが帰ってから一時間が経過した頃、アルウはやつと我に返った。留年するかもしれないというのはショックが大きく、受け入れ難い事だったが、食事も食べずにずっと部屋に閉じこもっているキメラが心配だったので、彼女が一人なのを見計らって慰めにきたのだ。

「メラー？ 入るぞ？」

そう声をかけるも、返事は返ってこない。返事もないのに女の子の部屋に入るのは気が引けたが、思い切って扉を開けた。

女子部屋は至って簡素だった。人形やぬいぐるみで部屋を飾る女の子もたくさんいるだろうが、そんな物はまったくくない。勉強机とクローゼットが二つずつ置いてあり、ロットの物であろう本棚には溢れんばかりの魔術書が無造作に入られている。そんな中、キメラは窓際に置かれている大きなベッドに、こちらに背を向けるようにして腰かけていた。

「……返事もしてないのに、勝手に部屋に入らないでよ」
振り返りもせずに、キメラは言う。

「わ……わりー」

そう言いながらも、アルウは部屋に入り後ろ手で扉を閉めた。

「で、何か用なの」

「ずっと部屋に閉じこもって出てこないから、さっきの話で相当なショックを受けてるんじゃないかって心配で——」

「ショック受けてるのはルウの方じゃないの」

キメラは冷たく言い放つ。“一人にさせてくれ”オーラが確実にそこらを漂っている。

「まあな。そりゃ誰でもショックぐらい受けるだろ」

ここまで言われれば苦笑いするしかない。部屋に閉じこもっているながらも、キメラはリビングの様子を探っていたようだ。

「メラこそ大丈夫なのか？」

「……誰でもショックぐらい受けるんでしょ？ だったらそうなんじゃないの」

アルウはひゅうと息を吐くと、真面目な顔で告げた。

「もし留年したとしても、俺と一緒にだし、心配すんな」

キメラは振り返らない。身じろぎもしない。今、彼女がどんな表情をしているのか、アルウには分からなかった。

「……そうね。友達と一緒になら大丈夫よね」

友達……。その一言に、アルウは胸を痛めた。

「ま……まあそれが言いたかったただだから。じゃ、おやすみ……」
平然を装うも、明らかに元気がなくなっているアルウは、暗い表情で女子部屋を出た。

女子部屋を出ると、目の前にはリビングが広がっている。リビングの右端にある扉、それが女子部屋への入口なのだ。

アルウは椅子の上に豪快に座った。

「はああ……」

思わず、溜息が漏れる。

——「……そうね。友達と一緒になら大丈夫よね」——。

そのキメラの言葉が、頭の中を支配している。

「友達、か……」

アルウは天井を仰いだ。

「恋愛対象に入っていないって事か。俺はメラの事が、好きで好きでたまらないのにな……」

ふっと口元に淋しそうな笑みを浮かべると、アルウは女子部屋の向かい——リビングの左端にある男子部屋に入ってしまった。

「いいお湯でしたわー。キメラも入ってきたら？」

風呂から出てきたロットは、白の混じった茶髪——ミルキープ

ラウン（キメラ達はミルクティー色と呼んでいる）のふわふわとした長い髪から滴る水を、柔らかいタオルで拭いながらキメラに声をかけた。

しかし、いくら待ってもキメラから返答はない。ロットは首を傾げて、キメラの隣に腰を下ろした。

そして、キメラの顔を覗き込んだロットは小さく溜息をついた。キメラの銀色の瞳から、キラキラと光る小さな粒——涙が零れているのだ。手には、キメラがいつも身につけている首飾りが握られている。

「また泣いていましたの？」

キメラはこくと頷き、涙を拭くと久しぶりに口を開いた。

「さつきルウが来たけど、泣いていたし、一人にしてほしかったから冷たくしちゃった。——お願いしてたのよ。どうか、制御が完全になるようにって」

両手で包むようにして首飾りを握っていた手を、キメラはゆっくり開けた。

銀色のチェーンの先には、縦三センチ、横二センチ程の薄っぺらい銀板がひっついていて、銀板の表には丸い小さな紅い石、レッドスピネルが埋め込まれ、その上にS・D・Vと彫られている。

他の三人も、似たような首飾りを持っている。アルウの首飾りには黒い石、ブラックオニキスが埋め込まれ、その上に彫られている字はキメラと同じだ。ロットの首飾りには蒼い石、サファイアが埋め込まれ、その上にはキメラ達とは異なつてS・G・Vと彫られている。ザルガスの首飾りには白い宝石、ダイヤモンドが埋め込まれ、彫られている字はロットと同じだ。

これは、村に来た時から身に着けている物だ。四人は最初、この首飾りが自分達の過去に関係あるんじゃないかと考えていたが、埋め込まれている石の意味も、彫られているS・D・VとS・G・Vの意味もまったく分からないから、ある日考える事をやめた。

「この紅い石、ずっと見ていると吸い込まれそうになる。私は、こ

の首飾りには不思議な力が込められていると思うわ。もしかしたら、願いを叶えてくれるかもしれない……」

これこそが、ロットが最近キメラの事を心配している理由だ。

キメラは毎日、寝る前に必ず首飾りを見つめている。そして、いつも涙を流す。最近の寝る前は、いつもこうだ。

「……ねえキメラ」

ロットはキメラの頭の上に、軽く手を置いた。

「いい加減、その首飾りを見るのをやめたら？ それを見ている時のキメラ、少し可哀しいですわ」

「そう？ いつもの私と変わらないけど」

キメラは首飾りを首に提げると、ベッドから立ち上がった。

「でもロットがそう言うのなら、なるべく見ないようにするわ。じゃあ私、お風呂に入ってくるね」

そう言つと、キメラは女子部屋を出ていった。

1 - 3 (後書き)

どうでしたか？

私的には、このお話は結構好きなのですが…… ^^

いつも通り、ご意見・感想お待ちしております。

1 - 4 (前書き)

ちよつと短い……。

アルウとザルガスはつか出てきます。キメラもちよつとだけ。ロツトは出番なし。

キメラとロットが部屋で話していたちようどその頃、アルウは男子部屋でうなだれていた。

「ザルガスー！ 俺、これからどうしょー……」

ベッドに仰向けに寝転がっているアルウは、椅子に座って本を読みふけているザルガスに声をかける。

「何？ 留年の事か？」

「違いよ！ メラの事」

アルウは床に落ちていたボールを寝転がったまま拾うと、ザルガスに向かって投げつけた。ザルガスはそれをうつとうしそうに避ける。

「“友達” って言われた事か？」

「そ！ 俺、恋愛対象で見られてねえのかな……さつきもすげー冷たかったし」

そう言うのと、アルウは女子部屋での出来事を細かく話した（さつきは“友達”の所だけ話していた）。

「その冷たい態度、お前だけに限らないぞ？」

アルウの話を聞き終えると、ザルガスは本を脇に置き、先程避けたボールを拾ってアルウに投げ返した。

ボールを受け取る為に上半身を起こしたアルウは、頭の上にクエスチョンマークを浮かべる。

「どういう意味だ？」

「一昨日の夜、トイレ行こうと思ってリビングに出たら、キメラが水を飲んでたんだよ。『寝れないのか？』って声かけたら、あいつ、さつさと水を飲み干して部屋に戻って行ったんだ。意味が分からないから今日の朝、ロットにその事を言ったんだ。そしたらさ、『最近のキメラ、少しおかしいのですわ。毎晩首飾りを見つめて、涙を流しだしますの』だよ。だから、夜は話しかけてもあまり反応を

しないらしい」

「それって……俺にもまだ望みがあるって事か!？」

金色の瞳をキラキラと輝かせ、アルウは思わず身を乗り出す。

「望みがあるにしろ無いにしろ、諦めるなんてお前らしくない。どうせ諦めるのなら、振られてからにしろ」

そう告げると、ザルガスはまた本を読み出した。その題名が、ちらりと見えた。

緑色の表紙に、黒い字で『魔法使いの基本』制御、魔法陣、呪文』と書かれている。

それを見て、アルウは言葉になっていない奇声を発した。

「何だよ急に」

突然の叫びに驚きつつも、ザルガスは冷静に尋ねる。

「俺……次制御失敗して問題を起こしたら、留年になるんだった」

……

「それをよく忘れられるな」

本のあるページを開くと、ザルガスは「おい」とアルウを呼んだ。

「お前らが制御出来なくなるのって、魔法陣を見た時だよな？」

「そうだけど？ 魔法陣を見ると、無意識に魔法を使ってしまうんだ」

ザルガスは金色の切れ長の瞳を更に細め、「解せない」と呟いた。

「は？ 何がだよ」

「『普通、魔法を使う時は魔法陣を存在させなければならぬ。存在させるのは頭の中でも、紙の上でも、どこでもよい（記憶力のある者は頭の中に思い浮かべる）。魔法陣を存在させたならば、次は素早く呪文を唱える。そうすれば、魔法は発動される』」

本に書かれている一文を読み上げると、ザルガスは本から目を上げた。

「これは基本中の基本。お前も勿論知っているよな。次読むぞ」

何ページかめくると、ザルガスはまた読み始めた。

「『発動した魔法の力加減、継続時間を操る事を、制御という。制

御が不完全な者というのは、発動した魔法を操れない者の事を言う」

「そこまで読むと、ザルガスは本を閉じた。

「何故俺が解せないのか、分かったか？」

アルウはゆっくり瞬きをした。

「……ワカンネエ」

「……そうだった。お前は魔法の腕は一流だが、頭は馬鹿だった」

ザルガスは、はあと溜息をつく、アルウの目を強く見据えた。

「普通、制御が出来なくなるのは魔法が発動した後だ。だがお前達は、魔法が発動する前、しかも魔法陣を直に見た瞬間に制御が出来なくなる。おかしいと思わないか？」

ザルガスが根気強く説明をすると、馬鹿なアルウもやっと理解した様子。

「確かにおかしい……なあ」

アルウは腕を組み、うーんと呻いている。第一、自分の事だといふのに分からない事があるのは少し気味が悪い。

しばらく沈黙が続いたが、その静寂を破ったのは扉のノック音だった。

「何だ？」

ザルガスがぶつきらばうに返事をする、ちよこつと扉が開いた。

「お風呂……出たよ？」

少し開いた扉から覗いている顔は、紛れもない、キメラだった。

アルウはびっくりしてベッドから飛び上がった。

「ああ、分かった」

「じゃあ、おやすみ」

そう言つと、キメラは扉を閉めた。……が、すぐにまた扉が開いた。

キメラの不可解な行動にアルウとザルガスは首を傾げていたが、キメラはそんな事は気にせず、その銀色の瞳でアルウだけを見つめていた。

「ルウ……さつきはごめんね」

そう言つと、キメラは扉を閉めた。今度は、扉が開く事はなかった。

あまりに急な出来事に、アルウは呆然としている。

「……良かったな、アルウ」

ザルガスが声をかけると、アルウは我に返つた。

その後、男子部屋が歓喜の声に包まれたのは、言うまでもない。

1 - 4 (後書き)

どうでしたか？

いつも通り、感想・意見お待ちしております。

第二章 ヨウタとリユン 2 - 1

翌朝、キメラが目を覚ますと幸せそうに眠っているロットの寝顔が目に入った。人形のような愛くるしい顔立ちの彼女の寝顔は、見る者を和ませる何かがある。

キメラはベッドから起き上がると、腰まである長い赤金髪を二つに結んだ。寝巻を脱ぎ捨て、学校の制服に身を包むと、キメラは窓辺へと歩み寄った。

外では、ザルガスが見えない相手に向かって木刀を振るっている。窓を開けると、キメラは朝にしては元氣過ぎる声で言った。

「ザルガスー！ おはよう！」

キメラに気が付くと、ザルガスは木刀を軽く上げた。

「おう」

ザルガスに向かって手をぶんぶんと振ると、キメラは部屋を出た。リビングはどこかひっそりとしていた。きつと自分以外に起きている者がいないからだろうと、キメラは考えた。

ザルガスは外でケンドウ（東の国のスポーツ）をやっているし、ロットはまだ眠っている。アルウもきつとまだ眠っている（アルウとロットは大分の寝坊魔である）。

キメラは食料棚を開けると、パンを四切れと小さな瓶を取り出した。瓶の中身は、とろりとした赤いベリージャム。アルウの好物である。

パンを皿に載せ、ジャムを机の上に置くとキメラは隣の棚から大きなミルク瓶を取り出した。四つのマグカップにそれを注ぐと、キメラの朝の仕事は終了だ。

この家では、それぞれの役割分担がある。キメラの役割は、毎日の朝ご飯の用意と休校日の街への買い出し、それにミュラン（貝で出来たアクセサリー）作り。ロットは夜ご飯の用意と、後はキメラと同じ買い出しとミュラン作り。アルウは食器洗い（朝）とベリー

ジャム作り、休校日の森への食料調達。最後にザルガスは食器洗い（夜）と家の掃除、そして食料調達である。

しっかりと自分の役目を終えたキメラは、表にいるザルガスを呼びに玄関へと向かう。

玄関の扉を開けると、「ザルガスー！」と大声で呼んだ。

ややあつて、ザルガスは額に浮いた汗を拭いながら呼びかけに応じた。

「どうした、キメラ」

「ご飯の用意出来たよ」

あまりおしゃべりでない彼は何も言わずこくりと頷くと、ゆつくりとこちらに向かって歩いてきた。キメラは扉を開けっ放しにしたまま、女子部屋へと向かう。

部屋では、ロットが可愛い顔でまだ眠っていた。幸せそうに眠っているところを起こすのは申し訳ないが、仕方がない。起こさなければ学校に遅刻してしまう。

「ロットー！ 朝だよ、起きて」

ゆさゆさと揺さぶりながら言うも、まったく反応はない。

キメラは溜息をつくと一歩後ろに下がり、足を肩幅に開けてふんばると、大きく息を吸った。

「ロットおおおお！！ 起きろおおおお！！」

次の瞬間、ロットは飛び起きた。

「な……何！？ 何事ですか、キメラ！？」

「朝ご飯の用意が出来たのよ、ロット。早く服を着替えて食べにおいで」

そう告げると、キメラは女子部屋を出た。次に向かうのは、男子部屋である。

扉を開けると、アルウは腹を出して眠っていた。いびきこそはかいていないが、くかーくかーと平和そうな寝息が聞こえてくる。

キメラの口から、思わず溜息が漏れる。

毎朝、ここまでの仕事はキメラにとって何の苦もないのだ。

朝が弱いわけではないから朝早く起きるのも別段辛くない。朝ご飯の用意といっても、いつも簡単に済む。ロットを起こすには、大声を出せばよい。

しかし、アルウを起こすにはそうはいかない。家が震える程の大声を出しても、この寝坊魔にはまったく歯が立たないのだ。

起きないと分かっているながらも、キメラは一応声をかける。

「ルウ、朝だよ、起きて！」

くかーくかと、暢気な寝息は止まらない。

「ルウ！ 起きなさい！」

くかーくかー。

「アルウ！ 起きなさい！」

くかーくかー……。

痺れを切らした彼女は、壁に立てかけてあった木刀を手にとると、それをアルウの腹に向かって思いっ切り振り下ろした。

「うつ……」

バシッと激しい音がした後、アルウは顔をしかめて軽く呻いた。やっと起きたわね……そう思い、キメラが木刀を下ろしたのも束の間、また幸せそうな寝息が聞こえてきた。

キメラはにこやかに笑っていた。額に青筋を浮かべて。

自分の右手をアルウにかざすと、頭の中に水の魔法陣を思い浮かべた。

「タオウ！」

呪文を唱え終わると、キメラの手から寝ている少年の顔に向かって水流がほとばしる。

ほとばしった水はアルウの顔面を直撃し……なかった。水が直撃したのは、枕であった。

「ばーか。とつくに起きてるんだよ！」

アルウがしてやったり、と枕の後ろから顔を覗かせる。

……そういう事か。ルウは起きていたけど、寝たふりをして私をからかっていた。水魔法が自分に当たる瞬間に、枕を盾代わりにし

たのね……。

アルウの顔を見て、彼が何をしたのか悟ったキメラは、無表情で腰に携えている護身用の短剣を手にとった。それを、まだ横になつてケラケラと笑っているアルウの目の前に思いつ切り突き立てる。

アルウを黙らせるのに成功した彼女は、剣を鞘に収めると、満面の笑みで告げた。

「ルウ、朝ご飯出来たよ！」

誰からも好かれそうな、可愛らしい笑顔だったが、アルウにとっては恐ろしいばかりだった。

天使の微笑みのまま彼女は、扉が壊れそうな勢いで部屋を出ていった。

2 - 2 (前書き)

投稿が早いのは、内容が短いからです。
いつも二千字前後だけど、今回は千五百字程度。

部屋を出たキメラは先に朝ご飯を食べていた二人には目もくれず、ロットの隣に乱暴に座った。

「キメラ、どうしましたの？ 物凄い顔をしていますわ」
「別に」

物凄い顔のまま、キメラはジャム瓶を引き寄せた。半分程残っていたジャムを、全て自分のパンの上へと落とす。

「おい……ジャム多過ぎないか？」
「別にいいでしょ」

「アルウの分が無くなりましたわ！」
空っぽの瓶を振りながら、ロットがキメラへ抗議する。

「知らない、あんな奴」
プイツとそっぽを向き、多量のジャムでべたべたになったパンにかじりつく。それとほぼ同時に、アルウが部屋から出てきた。

「おはよう、アルウ」
「やっと起きたか」

二人の言葉におう、と返事をする、アルウは無言でザルガスの隣に腰を下ろした。

「メラ……さつきはごめんな……」
アルウは、しよげた顔で言った。

そっぽを向いていたキメラは、彼に向き直りにっこりと笑った。
「ううん、私、気にしてないよ！」

「……へ？」
てつきり無視されると思っていたアルウは、素っ頓狂な声をあげた。

「本当に……？」
「嘘つく必要なんてないでしょ？」

ころころと笑うキメラを、ロットとザルガスは冷めた目で見てい

た。これから起こる事を、二人はいともたやすく想像出来たのだ。巻き込まれないように、そっとその場を離れる。

「だ……よな！ あのぐらいで怒ったりしねえよな！」

心底安心したようにアルウは笑うと、ジャム瓶を手に取った。蓋を開け、中味をパンに落とすが、勿論ジャムは出てこない。

彼は首を傾げると、瓶の中を覗き込んだ。中は、空っぽである。

アルウは、ザルガスの皿を見た。パンはもうない。次に、ロットの皿を見る。こちらも、パンはない。最後に、キメラの皿を見る。

大量のジャムが載ったパンが、半分程置かれている。

アルウは立ち上がり、か細い声で呟いた。

「俺の……ベリージャム……」

金色の瞳に憎悪の光を宿すと、彼はジャムを全て使ったキメラを睨んだ。

「何で俺の分のジャム残してねえんだよ！」

それに負けじと、キメラも音を立てて立ち上がった。

「仕返しに決まってるでしょ？ せつかく人が起こしてやったのに寝たふりってどういう事よ！」

「確かにそれは悪かったと思ってるけど！ ジャムを全部使わなくてもいいだろ！？ 俺の大好物って知ってるくせに！」

「それはあんたが——！」

「もう止める」

反論しかけたキメラだったが、ザルガスの静かな声を聞き自制した。

「二人とも見苦しいですわ！」

腰に両手を当て、ロットは憤慨した。

「アルウ、起こしてくれるキメラに対して、寝たふりなんて傲慢な態度はよくないですわ」

「おう……」

ロットからの厳しいお説教により、アルウはしゅんとした。そんな彼を見て、キメラは偉そうに腕を組んで意地の悪い笑みを浮かべ

る。

「キメラもキメラだ」

キメラの態度を見たザルガスが言う。

「アルウの悪戯に腹が立つのは分からんでもない。だが、それに仕返すのはどうかと思う」

「うん……」

ザルガスの指摘に、キメラもすっかりしよげ返ってしまった。

「もう出ないと遅れてしまいますわ」

うなだれている二人に、ロットは柔らかに告げる。

二人は「うん……」と遠慮がちに頷くと、玄関に向かった。

玄関に置いてある真つ黒なローブを羽織って（ローブを羽織るのは魔法学校の生徒の証。外に行く時は必ず羽織らなければいけない）、外に出る。

外は、朝の清々しい空気に包まれていた。

その空気を、キメラは目一杯吸い込む。胸に新鮮な空気が入り込むと、不思議と気持ちが軽くなった。

キメラは隣にいるアルウに向き直った。

「ルウ、さつきはごめん……」

その言葉に、アルウは驚いたように顔をあげた。きっとキメラに謝られるなんて思ってたのだろう。

「や……俺こそごめんな」

その言葉に、キメラは穏やかに微笑んだ。それは彼女本来の、自然の笑みであった。

2 - 2 (後書き)

キメラとアルウの喧嘩風景。

二人ともまだまだ子供だな…… ^^

それに引きかえ、ロットとザルガスはすごい大人。二人の親みた
いだなあ。

次話では、第二章のタイトル「ヨウタとリュン」のヨウタが出てく
る予定です。

感想・ご意見お待ちしております。

2 - 3 (前書き)

また短い。

ヨウタは案外好きなキャラです^^

キメラとアルウより遅れて外に出たロットとザルガスは、二人を見てほっと息をついた。

仲直りしたのだろうか、二人は仲よさ気に笑っている。

「仲直りしたみたいだな」

「ええ。良かったですわ」

ロットは嬉しそうに笑った。その顔を、ザルガスがちらりと見たが、ロットは気が付かなかった。

「ロットー！ ザルガスー！ 行こうよ！」

玄関前に立ち尽くしているロットとザルガスに、キメラは大声で呼びかける。

「今行きますわ！」

キメラに返事をする、ロットはミルクイーフラウン白茶髪を風になびかせながら歩きはじめた。ロットの半歩後ろを、ザルガスは歩く。

ロットとザルガスが自分達の元に着くと、キメラはおもむろに右手を出した。瞳を閉じ、頭の中に無の魔法陣を思い浮かべると、呪文を唱える。

「ブルム」

すると、右手の下に黄金の光と共に箒が現れた。

キメラは満足げな笑みを浮かべ箒にまたがると、他の三人を見た。三人とも箒を出し、もう飛ぶ準備が出来ていた。

キメラは三人に頷きかけると、地を思いつきり蹴った。箒は重力をまったく気にせず、ぐんぐんと上昇していく。十メートル程浮上すると、ぴたりと止まった。

「やっぱ朝はいいねー」

箒の上で、うーんと伸びをする。普通、箒の上で伸びなんかをしたら地上に真つ逆さまだが、キメラは並外れたバランス感覚を持っているからそんな心配はない。

「早く行きましょう、キメラ」
「そうだね。しゅっぱーっ！」

キメラの元気な声とともに、四人は北に向かって進みはじめた。

キメラ達の暮らすキザナの村から北に三十キロ程飛ぶと、ベイス魔法学校が見えてくる。色んな方角からやって来るローブを羽織った飛行物体が、次々と学校に降り立っていく。

キメラ達も、地上に向かって降下する。風がローブをはためかすが、そんなことは気にしない。ぐんぐんと高度を下げていき、地面すれすれまで降りると、箒は軽く砂埃を舞い上げふわりと止まった。地に足をつけ、箒から下りると、箒はふっと消えた。

「やっと着いたねー」

「学校の行き帰りだけで疲れますわ……」

「三十分も飛ばないといけないからな……」

ロットとザルガスは疲れた顔をしているが、赤金髪の少女と少年はむしろ楽しそうな顔をしている。

「早く教室行こうぜ！」

アルウが先頭に立ち、校舎に向かって歩きだそうとした。――が、それは阻まれた。

「おはようキメラ」

背後から聞こえた声に、四人をぐるりと振り返った。

自分達のところから数歩後ろに、黒い髪に黒い瞳をもつ少年が立っていた。

「ヨウタ！」

アルウの愛する少女は、謎の少年の元に駆け寄って行った。嬉しそうに、顔をほころばせて。アルウに見せない表情であった。

「な……なあロット。あいつ誰だ？」

不安に駆られた彼は、隣に立っている白茶髪の少女に問う。

「キメラと仲良く話している人の事？」

「ああ……」

「彼はヨウタ・ミズミヤと言って――」

「ヨウタ・ミズミヤだって!？」

その名に反応したのは、意外にもずっと黙っていたザルガス・クリナーであった。

「ザルガス、知ってんのか？」

「名前だけだがな。……彼は、俺ら一年生の中でも五本の指に入る優秀な魔法使いだ」

「へえ……。俺らって入ってんの？」

「ええ、入っていますわ。……話を戻しますわよ？　ザルガスの言うとおり、彼は優秀な魔法使いですわ。彼の瞳と髪を見たら分かると思いますけど、ヨウタさんはこの国の出身ではないのです」

「……東の国だな？」

確かに、彼の黒い瞳と髪をこちらの国のものではない。それは顔を見た瞬間分かった。

「ご名答ですわ、ザルガス。彼は、ベイスの校長先生にこの学校へ来るよう誘われたようですのよ」

「何でわざわざ誘うんだよ？」

ヨウタがキメラと話しているのが気に入らないのか、アルウは低い声で尋ねた。

「あらか知らないの？　ベイス魔法学校は数ある魔法学校の中でも、最も優秀な魔女・魔法使いを輩出する学校。そんな魔法学校の校長が、優秀な魔法使いの卵をスカウトするのは当然の事ですわ」

「ふうん……」

ロットの説明を受け、納得したアルウだったが、体中から不機嫌なオーラをかもし出している。

「あら、ヨウタさんと言えば……」

ロットは小さく呟くと、キメラとヨウタの元へ歩み寄っていった。

2 - 4 (前書き)

昼間は母が仕事なので、その隙に大量執筆。
あ、また短いです^^;

「それにしてもヨウタ、今日は学校に来るのが随分早いね。いつもは遅刻ギリギリなのに」

「今日日直なんだよ、俺。いつもだったら――」

「あの……ヨウタさん、今日ファルズは一緒じゃないんですの?」
ひよっこり話しに加わったのは、まぎれもなくロットである。

「ああ、おはよう、ロットさん。今日は俺、日直だからさ。ファルズは置いてきたんだ」

「そうですの……」

残念そうに、呟く。

そんな彼女をザルガスは無言で見いていたが、ロットがそれに気がつくわけなかった。

「早く教室に行かないと。じゃあね、キメラにロットさん」

女子二人に別れの言葉を告げると、黒髪黒目をもつ少年は校舎に向かつて歩き始めた。アルウとザルガスの横を通り過ぎる時、ヨウタは軽く頭を下げ、こう言った。

「初めまして、アルウ・パンプローナ君、ザルガス・クリーナー君。君達の事はよく耳にするよ。これからよろしく。じゃあ」

再び頭を下げると、ヨウタは校舎内へと消えた。

「なあ、ファルズって誰だ?」

ヨウタが校舎内へ消え、女子二人が自分達の元に戻ってきた途端にアルウはロットに尋ねた。

「ファルズは本名、ファトヒルズ・ディレクサンダーて言いますの。ヨウタさんがホームステイをしている家の人で、ヨウタさんとは違って規格外の馬鹿ですよ」

教室へと向かいながら、ロットは答える。

「……で? ロットはそのディレク何とかとどういう関係なんだ?」
「クラブが一緒なだけですわ」

「ああ……あの変術クラブ、だっけ？」

「違いますわ！ 学校では習わない魔法を勉強する、シークレットクラブです！ 変術なんて辛辣な言葉で呼ばないで下さい！」

いつもは上品なロットだが、シークレットクラブの事を悪く言われると絶対に猛反論をする。

「あー、ごめんごめん。っていうか、ただのクラブ仲間だったらさ、何でさつきあんなに落ち込んだんだ？」

「馬鹿がいないとクラブが盛り上がらないんですもの。ただ、それだけですわ」

「ふーん……」

ジト目で、ロットの事を見る。そんなアルウの行動にロットはとうとう痺れを切らした。

「もう！ さつきから何ですの、アルウ！？ ファルズの事を根掘り葉掘り聞いて！ いい加減うざったらしいですわ！」

「俺が何だつて〜？」

教室の前で佇んでいた四人は、突然会話に入ってきた声の主をさつと振り返った。

そこには、紺色の髪にグレーの瞳をもつ少年が立っていた。綺麗な顔立ちをしているが、へらへらと笑っているため頭が弱そうに見える。

「何でもありませんわ、ファルズ。それよりも、今日も遅刻ギリギリですわね。ヨウタさんはとっくの昔に着いてますわよ？」

ロットはアルウを一睨みすると、ゆっくりファルズの方へと歩いていった。

「私達、先に教室に入っておくよ？」

教室の扉に手をかけながら、キメラは言った。

ロットがこくりと頷いたので、キメラは自分のクラス……一年月組の扉を開け中に入っていく。キメラを追うようにアルウ、ザルガスの順で教室に転がり込んでいく。

教室に入る前、ザルガスはちらっとロットを見た。楽しそうにフ

アルズなる男と話している彼女が目映る。ザルガスは小さくため息をつくと教室の扉を静かに閉めた。

2 - 4 (後書き)

最近、ザルガスがロットのことを見ている場面よく書きます。
書く度に、お前はストーリーカーか！とつつこんでおります^^ (笑#

さて、新キャラが出てきました。

ファトヒルズ・ディレクサンダーさん。

なんかすごい名前……。

何故こんな名前を思い付いたのだろうか、自分よ……。

2 - 5 (前書き)

一週間ぶりの投稿。
なかなか話が進まない……。

教室に入ると、色んな人がキメラ達に声をかけてきた。

「おっはようーキメラ」

「アルウおはよー」

「よっ！ ザルちゃん」

そんな呼びかけひとつひとつにおはよう、とかザルと呼ぶな、などと返す。

自分の席にたどり着くと、キメラはローブを脱ぎ、すんと腰を下ろした。キメラの隣にはアルウ、さらにアルウの前にはザルガスが座る。ザルガスの隣は、ロットである。

「なあメラ」

ローブをたたんでいたキメラに、アルウは声をかけた。

「何？」

「ヨウタとは、どんな関係なんだ？」

唐突にされた質問に、キメラは訝りながら答える。

「何の関係も。ただの友達」

「じゃあ、どうやって知り合ったんだ？ クラブも違っただろ？」

「別に、どう知り合ってもいいでしょ？」

少しイライラしたような口調で告げると、さらに言葉を紡ぐ。

「さっきから何なの、ルウ。ロットにはファトヒルズ君のこと聞かし、私にはヨウタのこと聞いて。ほんと、一体何なの？」

「別に。何もねえよ」

ぶいとそっぽを向いたアルウに「変な奴」と告げると、キメラは他の友達の元に行った。

キメラが仲の良い友達と話し出すと、ザルガスは後ろを振り返った。その表情は、少し険しい。

「アルウ」

「何だよ、ザルちゃん」

「その名で呼ぶな」

眉間にしわを寄せながらアルウを諭すと、さらに言葉を続ける。

「お前、キメラやロットに聞き過ぎだ」

「だって気になったんだもん！　ザルガスは気になんねえのかよ？
好きな奴らに親しい男がいたら――」

「気になるに決まっている」

アルウの言葉を遮り低い声で告げると、アルウは押し黙った。

「だが俺は、二人の交友関係に首を突っ込もうとは思わない。親しい男がいようといまいが、誰かと付き合っているといまいが、俺はロットの事が好きだ。その気持ちに変わりはない」

ザルガスの言葉には、なかなかの説得力があった。現に、アルウは考えを改め始めていた。

「そう……か。そうだよな！」

うんうんと頷くと、彼らしい笑顔を浮かべた。

「さんきゅーな、ザルちゃん！」

「だからその名で呼ぶなと言っていているだろう。……わかったらなら、後で二人に謝っておけ。キメラはわからんが、ロットはだいぶ怒っている」

「おう！」

アルウが元気よく頷いたのを見ると、くるりと前に向き直った。それとほぼ同時に、キメラが席へ戻ってきた。怒っているのだろうか、アルウの事をちらりとも見ずに、机の中から小さな箱を取り出した。

箱の中には金色の細い糸と、色とりどりの貝殻が入っている。

そう、キメラはミュランを作ろうとしているのだ。キメラ達は主にミュランを売り、生計を立てている。

キメラは左手に糸を持ち、右手で貝殻を持つと、貝殻に糸を通しはじめた。貝殻が一つ通ればまた、新たな貝殻を通す。この作業を幾度も繰り返し返すと、ミュランが完成するのだ。

彼女が手早くミュランを一つ作り上げたところで、アルウは遠慮

げに言葉をかけた。

「ああー……メラ？」

彼の言葉に、キメラは視線を少しあげた。何も語りはしないが、その瞳は「何なの」と言っている。

「えっと……さっきは色々と、ごめんな……」

「……別に。私怒ってるわけじゃないし？　ただ変な奴って思っただけ」

おどけたような表情をすると、キメラは視線を机の上に落とした。机に散らばっている貝殻や糸を、箱に戻すとその蓋をパタリと閉じた。

「でもロットは違うわ。あの子、相当怒っている。早く謝った方がいいんじゃないの？」

箱をしまいながら言ったキメラの言葉に、アルウはこくりと頷いた。

2 - 6 (前書き)

キャラが増えていく……。

アルウが頷いてから数分後、ロットは教室に入ってきた。クラスメートの挨拶を上品に返し、彼女は自分の席に腰を下ろす。

「ロット、明日売り出す分のミュラン作り終えたよ」

「ありがとうキメラ」

後ろを振り向き、上品に微笑む。いつも変わらないロットである。

（今よ！）

キメラはロットに気づかれぬよう、そつとアルウに目配せをした。頷くと、アルウは彼女の名を呼んだ。

「ロット！」

ロットは一瞬だけ眉をぴくりと動かしたが、何事もなかったかのように会話を続ける。

「何でございましょうか、アルウ・パンプローナ殿」

あー……終わった……。

そんな一言が漏れそうになり、キメラは慌てて口をつぐんだ。

ロットの口調がいつもより丁寧になった時、それは天変地異の前触れだと、キメラは思っているのだ。

「いや……さつきは色々と聞いて悪かったからさ、謝ろうと思って

ロット、ごめ——」

「その必要はございません」

にこやかに、アルウの言葉を遮る。

「ファトヒルズ・デイレクサンダー殿のことを詳しくお聞きになったこと、わたくし少しも気にしておりません。ええ、ちーつとも。

あーうざったらしいんだよこの●●野郎！　って思っただけですわ……いえ、思った（……）ではなく、思っている（……）の方がしつくりきますわね」

恐ろしく怖い目でアルウを睨むと、ロットは前を向いた。

アルウは机に突っ伏し、うーとか、あーとか小さな声で唸り声を

あげている。

ダメだこりゃ、と言わんばかりにキメラは両手をあげ、顔を横に振る。

二人の亀裂が直るのは、一体いつになるのだろうか……？

キメラは頭をフル回転させて考えてみたが、答えにはたどり着かなかった。

「はい、みんなおはようー！」

おっとりとした声が聞こえてきたのは、アルウが机に突っ伏してから約十分後のことだった。

あれから四人の間には、気まずい沈黙が流れていた。

ロットは後ろ姿からも怒りが伝わってくるし、アルウは相変わらず突っ伏している。ザルガスはロットとアルウを気遣ってか、一言も言葉を発さない。キメラも何となく喋らなかったが、暇で暇で堪らなかったのだ。

「えっとお知らせは……何もないかなあ！」

おっとりとした話すのは月組の担任、マリユラ・ニコラスである。現在二十四歳、校内で一番若い新任教師だ。

「一限目は活ク（＝クラス活動）だからあ、このまま授業に入りませう！」

マリユラは顎に手を当て何か考えていたようだが、しばらくするとうーんと伸びをし、からりと笑った。

「特にすることないし、決闘でもしよつかあ！」

（……そんな楽しそうな顔で言うことじゃないでしょ！）

キメラは頬杖をつきながら心の中で突っ込んだ。

決闘というのは世間一般で言う、決着をつけるために命をかけて戦うことではなく、ただ単に魔法を使って対決することを指す。

「ペアはねえ、うーんと……」

マリユラはまた顎に手を当て考え始めた。

決闘のペア組みを考えるのは、生徒達にとっては容易なことだ。

どうせ、マリユラはいつもと変えないのだから。

「ルウ、今日は何パーセントの力で戦うの？」

突っ伏したままのアルウにそつと声をかける。キメラのペアは、いつもアルウなのだ。

「んー……」

顔をあげずに唸るアルウに、なおも話そうとしたキメラだったが、それはおつとりとした声に遮られた。

「今日は気分転換にいつもとは変えてみよつかあ！ そだなあ……」

……リーちゃんはミー君とでえ……」

「はあ！？ 何で私がミジュエルとなのよ！」

リーちゃんと呼ばれた少女が抗議の声をあげたが、マリユラは気にも留めず話しを続ける。

「ミコリンはー……」

「ねっ、リユン」

マリユラが一人一人のペアを発表をする中、キメラは隣の少女に声をかけた。

名はリユン・ソルプ。先程マリユラにリーちゃんと呼ばれた、茶色いショートカットが似合う、小麦色の肌の可愛い子である。

「……何、キメラ」

彼女は今、たいへん不機嫌であった。クリツとしたこげ茶の瞳を細め、睨むようにキメラを見ている。

「ペア、ドンマイだね」

囁くようにキメラが言つと、彼女は悪意を込めた目でキメラを睨んだ。

「なんであたしがミジュエルとなのよ！ あんな鼻水垂らしたくそガキ……」

リユンの口から叩きつけられる呪詛を適当に流しつつ、キメラは彼女のペアであるミー君、ミジュエル・ロワットをさつと盗み見た。砂色の髪がボサボサと伸び、常に鼻水を垂らしている汚い男子である。

彼は入学当初から、クラス的女子及び同学年の女子から、一番嫌われている。汚い外見と喋る時の気持ち悪さ、そして魔法もろくに使えないのだから、当然といえば当然だろう。最近では男子からも嫌われているという噂をよく耳にする。

キメラが憐れみの視線送ると、それに気付いた彼はニターと笑った。大きく開けられた口から、かけている醜い前歯が伺える。キメラはあまりの気持ち悪さに身震いをする、リュンの呪詛に耳を傾けた。

彼に笑いかけられるより、リュンの呪詛を聞くほうがよっぽどましだということに気付いたのだ。

2・7（前書き）

ひつさびさの投稿へへ；

「あんな齒のかけた奴と何であたしがペアに……」

リユンの呪詛は留まることを知らない。このままだと、永遠に続くのではないだろうか？

「キーちゃんはざっ君とねえ」

突如呼ばれた名に、キメラはぴくりと反応した。

「私がザルガスと……？」

マリユラにキーちゃんと呼ばれているキメラは、少し眉を寄せた。ザルガスとのペアに、不満はない。むしろ、あまり戦ったことのないザルガスと組むのは楽しみである。しかし、どうも嫌な予感があるのだ。このままだと、アルウとロットが組んでしまいそうなの……。

そんな予感が、キメラの体の中を駆け巡る。

そして、その予感は辛くも的中してしまうのだった。

「んで、最後はローちゃんとアッ君ねえ！」

マリユラがペアを発表したその刹那、ロットは周りに聞こえるほど大きな舌打ちをした。普段可憐な彼女からはおおそ想像できない態度である。

「あんたがザルとなんだ、珍しいね。にしてもロットどうしたの？ 随分機嫌が悪そうだけど」

「いやいや、今までお前のほうが不機嫌だっただろうが！ というリユンへの突っ込みはさておき、キメラはリユンの問いに答える。
「今さ、ルウとロット喧嘩してるのよ。ロットがすごい怒ってるの」

周りに聞こえないよう、キメラは声を潜めて言った。

「ふーん、大変そうだね。喧嘩中の二人がペアなんて今日の決闘、相当荒れんじゃないの？」

リユンの言う通りである。

キメラは小さくため息をついた。喧嘩中の2人がペアになって決闘をするなど、面倒臭い事態になるのは必至だろう。ましてや滅多に怒らないが、一度怒るとことんキレまくるロットのことだ。喧嘩相手^{アル}を徹底的にボコボコにしてしまっただろう。

「全員のペアも決まったことだし！　そろそろ初めよつかあ。リーちゃんにミー君。出といでー」

このマリユラの一言で、荒れるであろう決闘の幕が開いた。

決闘には、三つの掟がある。

一つ、常に本気の50パーセントの力で戦うこと（過去、本気で戦って死亡した生徒がいたからである）。

二つ、制限時間は10分。10分間全力で戦うこと（10分で決着がつかなければ引き分けである）。ただし負けを宣言するか気絶（50パーセントの力で気絶する者はほとんどいないが）をするかしたらそこで終了である。

三つ、礼に始まって礼に終わること（古きよき伝統を受け継ぐために）。

この三つの掟を必ず守らなければいけない。一つでも破ると、その者には重大なペナルティが課せられることになる。

三つの掟のもと、3年月組の決闘は始まった。

1番のペアはリユンにミジュエル——マリユラ風に言うところちやんとミー君——。このペアの戦いは、たったの8秒で決着がついた。その理由はとてつもなく簡単である。

まず、リユンは「ウイドウ！」と唱え、弱々しい風刃をミジュエルに向けて放った。赤子でも避けられるような、とてもゆっくりな風刃。

それはいくらなんでも——如何に無能なミジュエルでも——避け

れるでしょー！ とクラスメートから笑いが起こった。リユンも、クラスメートの方を見てげらげらと笑っている。

しかし突然、人が倒れるような鈍い音が教室に響き渡った。ミジュエルが、突然倒れたのである。

クラスメートたちの笑い声がぴたりと止み、リユンは少し顔をこわばらせた。

「まさかさ……リユンの風刃に当たって倒れたんじゃないよね……？」

誰かがぼつりと呟くと、教室内は異常にざわめき始めた。

「静かにい！ うん、その通りー。ミー君はリーちゃんの魔法で気絶したんだよー！ この勝負、リーちゃんの勝ちい！」

マリユラの勝利宣言を聞くと、リユンは気絶しているミジュエルに向かって優雅な一礼をした。

顔をあげると、リユンはスカートの裾をばさりと翻し、自分の席に向かった。

「……軟弱野郎め！」

その小さな呟きを聞いてしまったのは、隣の席のキメラ・ラーナボルカだけであろう。

リユンは可愛い外見をしているが、案外性格が悪いのだ。

「まさか50パーセント以下の力で気絶するとはね。100年に一人の逸材だね、ミー君はあ」

マリユラはため息をつく、ミジュエルを教室の端に転がしていった。

「さあ！ 決闘はまだまだ始まったばかりだよー！ 次のペア、行ってみようー！」

2・7（後書き）

あww

まじで話が進みません……。

だいたい、プロットではミジュエルとマリユラは出てこない、リュンももう少し後で出てきている。

どんだけ狂ってんだよ……、自分。

2 - 8 (前書き)

お久しぶりです。

風邪やら体育大会やらテストやらで、なかなか書けませんでした。^
^ ;

リーちゃん & ミー君ペアの後の決闘は順調に行われていき、それなりに白熱したものであった。

そしていよいよ、次はキメラとザルガスの番である。

「次はキーちゃんとザツ君だよ！」

マリユラの声を聞くと、キメラとザルガスは同時に立ちあがり、教壇の前に向かった。

「負けないからね、ザルガス」

ザルガスと対峙したキメラは、自信ありげな顔で告げる。

「それはこっちの台詞だ」

ザルガスもザルガスで、自信があるようだ。学校ではあまり笑わないザルガスが笑っているところを見ると、みなそう思うだろう。

「準備はいいー？ よし、始めえ！」

緊迫した空気が漂う。両者ともまったく動かず、お互いの動向を探っている。先に動いたのは、キメラだった。

「サダー！」

片手をザルガスにかざし、呪文を唱えると、稲妻がザルガスに向かって飛んでゆく。

「グランド」

ザルガスは土魔法の呪文を唱え土の棍棒を作り出すと、それでキメラの稲妻をいとも簡単に叩き落としてしまった。

「こんなもんか？ キメラ」

ザルガスは嘲笑を浮かべる。

勿論、キメラの実力はこんなものではない。ザルガスの技量を図るためにわざと初歩的な魔法を使ったのだ。

「まさか！ そんなわけないよ」

キメラはにっと笑うと、ザルガスとの間合いを一気に詰めた。それと同時に、風魔法の呪文を唱えるのも忘れない。

「なっ……！」

キメラの俊敏な動きに、ザルガスは驚きを隠せないでいる。キメラの戦い方というのは、いつも決まって遠距離戦なのだ。まさか接近戦に持ち込んでくるとは……。

浅はかだった……と、ザルガスは己の考えの甘さを呪う。

そうこう考えているうちに、キメラは風魔法によって創りだした小さな竜巻を、ザルガスの腕に向かって放った。その後、キメラはザルガスから離れ再び距離をとる。

「って……」

腕にかすかな切り傷がつき、そこからじむように深紅の液体が流れ出た。50パーセントの力でこの傷が出来るとは、キメラの魔力の高さを物語っている。

「接近戦とは、珍しいじゃないか」

「いつまでも遠くから魔法を撃つてるのもどうかないって思ってた」

「だからといって、俺に接近戦を挑んでくるとはな」

ザルガスは両の手の平をキメラに向け、再び土魔法の呪文を唱えた。どこから湧き出たのだろうか、握りこぶし程の石のつぶてがキメラに向かって飛んでいく。

巨大な石のつぶてに動じず、キメラは冷静に呪文を紡いだ。

「ラグス！」

緑色に透ける大量の木葉が現れ、キメラの前に壁を創りだす。ザルガスが放った石のつぶては、無残にも木葉バリアに当たり、砕け散った。

しかし、ザルガスはその一瞬を見逃さなかった。一つの攻撃を防ぎ、安心したキメラに隙が出来たのを。

今度は、ザルガスがキメラとの間合いを詰める。まだバリアを消していないキメラの顔に、戸惑いの色が浮かんだ。

（は……早い！）

恐らく、彼が次に使う魔法は火であろう。少なくとも、自分だったらそうする。草魔法は、火魔法とは相性が悪く、まったく歯が立

たないのだ。

「フイヤー！」

ザルガスが両手に火球を出現させた。それを、まずは木葉バリアに放つ。

バリアは赤々と燃え、ついには灰と化してしまった。キメラは顔を少し歪めたが、呪文の詠唱を試みる。

「タオ……」

「悪いな、キメラ」

ザルガスはふつと笑うと、キメラの細い足に向かって火球を放った。そして、三度距離をとる。

「わぁー……」

キメラは焼けただれた自身の肌を見て、哀しそうな声をあげた。

「すっごいヒリヒリするじゃん！」

プクツと頬を膨らませたキメラに、ザルガスは片方の眉を少しだけあげ、おどけた表情を作る。

「俺だって、さっきお前に切られた傷がしみて痛いんだ。それで自業自得だろう？」

その言葉を聞きさらに頬を膨らませながらキメラは、片手を上に向けた。

「サダー！」

呪文を紡ぎ終わると、片手の掌の上に小さな紫色をした雷球が出現する。キメラが力を込めると、それはゆっくり大きくなり始めた。ゆっくり、ゆっくりと、大きさを増していく。そしてついにはキメラの顔ほどに成長をした。

彼女はにんまりと笑うと、上にあげていた手をザルガスに向ける。「きっちり50パーセント。行くよ？」

ザルガスはこくりと頷くと、瞳を閉じて集中しだした。体の中にある魔力の半分を、どのように使うか検討しているのだ。

もちろん、検討が終わるまで待つなんて気は、キメラにはさらさらしない。雷球を放とうとした刹那――。

ピ……ピピ……と、この状況にはおおよそ不似合いな、アラーム音が聞こえてきた。何事かと、キメラとザルガス及びクラスメート達が音の出所に視線を向ける。

「ん？ ああ、１０分経ったみたいー！ キーちゃんとザツくんの決闘終了おー！ 二人は引き分けだよお」

音の出所は、マリユラのポケットの中にあつたストップウォッチ君。生徒からちゃんと覚えとけよー！ と声があがり、マリユラは「てへっ」と小さく舌を出す。

その様子を見てキメラとザルガスは同時に肩をすくめると、お互い礼をして自身の席に戻っていった。

2 - 8 (後書き)

戦闘描写ってムズいッスね……。
あー、文才が欲しい……。。

2・9（前書き）

一ヶ月ぶりの投稿です^^；
読んで下さっている皆様、どうもすみません。
。（、D、）。

席に着いたキメラは、自分の魔法によりザルガスに負わせてしまった切り傷を心配した。

「ザルガス……腕、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

ザルガスは軽く答えると、切り傷に手をかざす。

「ケル」

呪文を唱えると、手から銀色の光が溢れ、傷を包む。光が消えると、傷は跡形もなく消えていた。

「そっちこそ、火傷、大丈夫か？」

キメラは頷くと、ザルガスと同じように癒しの術を用い、傷を癒す。焼けただれた肌が元通りになり、ずきずきした痛みもすつと消えた。

「大丈夫よ」

ほら、と足を見せる。すると、マリユラが地獄の扉を開ける台詞を吐いた。

「次で最後だねえ。ローちゃんアツ君、おいでー！」

（と……とうとう来てしまったのね……）

そんなことを思いながら隣のアルウを見ると、彼は溜息をつきながら教壇へと向かう。そんな様子を見て、キメラは自分も溜息をついた。

キメラは視線をロットに移す。彼女は荒々しく立ち上がり、荒々しく教壇へ向かった。一歩歩くごとに、ロットの怒りが伝わってくる。これまた、キメラは溜息をついた。

もうどうとでもなっちゃえ！ そんな気になり、くくつと忍び笑いが漏れる。

隣の席のリユンが、驚いたようにキメラを見た。それもそうだろう、隣の席の女子がいきなり笑い出したのだから。

「キ……キメラ、どしたの？　とうとう頭おかしくなっちゃったわけ？」

リユンが戸惑いを口にするが、キメラは答えずに笑い続けるだけ……。

——そうこうしているうちに、アルウ・パンプローナとロット・ティラブスは教壇へとたどり着いた。

対峙する2人を見ていると、“喧嘩”していることが嫌でも分かってしまう。アルウは俯き、ロットは殺気を放ちながら殺意を込めた目で空を睨くんでいるのだから。さらに、ロットに至っては腕を組み、仁王立ちになっている。

「よしっ、始めえ！」

空気を読めないマリユラが、能天気な声で決闘の開始を告げた。

開始を告げられた直後、ロットは長い睫毛まつげに縁取られた瞳をすつと閉じ、両手を前に突き出す。

「ファイヤー！」

両手からわずか5ミリ程のところに、小さな火球が出現した。ロットは、それに力を込める。カんでいるせいか、ロットの白茶髪が、威嚇している子猫のように逆立った。けれども、彼女は力を込めるのを止めない。

小さかった火球はゆっくりと巨大化していき、今やロットの顔の大きさを遥かに超していた。どこからどうみても、50パーセントの力を超えているのが分かる。

「ローちゃん、50パーセント超えちゃってるよお？　それアツ君に当てちゃうと、反則になっ——」

マリユラは、そこで言葉を止める。ロットがそれはそれは恐ろしい、鬼のような目でマリユラを睨んだのだ。鬼のような目のまま、ロットは視線をアルウに移す。殺されるかもしれないアルウはというと、身構えもせず、ただそこにボーッと突っ立っていた。

「……サヨナラ」

無表情のままそう告げると、ロットは顔の4倍まで大きくなった

火球を、アルウに向かって放——てなかった。

ロットがそれを放とうとした刹那、授業の終わりを告げるチャイムが軽快に鳴り響いたのだ。

先程ロットに睨まれ消沈していたマリユラは、嬉々として告げる。

「授業終了おー！　ローちゃんアツ君、席に戻ってねえ」

ロットは渋々火球を消すと、10。だけ頭を下げ席に戻っていた。

「2限目は薬草学だよ。移動だから遅れないよーに！　それじゃ、終わります」

こうして、波乱の決闘は幕を閉じた。

2 - 9 (後書き)

本当に久しぶりの投稿。

なのにこんな駄文で不甲斐ないです(ノ・。)

お知らせ

やみたまを読んでくださっている皆様、お久しぶりです。海夜です。
去年の11月頃、このやみたまを一から書き直すことを決めました。
そして先程、書き直した作品を「改・闇の卵と光の卵」として投稿
致しました。

「<http://nk.syosetu.com/n1912s/>」
これからは改やみたまを読んで頂けると、嬉しいです。
尚、このやみたまはこのまま放置します。

皆様に頂いた感想などを消したくないからです。

では、今まで読んで下さった皆様、有難うございました。
これからは改やみたまをよろしく願います。

海夜音琴

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4896m/>

闇の卵と光の卵

2011年11月15日01時53分発行